

面林（写真 1-2-1）、林床にササ類が密生した落葉広葉樹林（写真 1-2-2）、放牧地が放棄され外来牧草が混生するササ原になった場所（写真 1-2-3）、林床が暗いスギ植林地（写真 1-2-4）が存在する。

東京大学農学生命科学研究科保全生態学研究室が対象地区内の合計 900m²を対象に 2009 年 5 月と 9 月に行った予備的な植生調査では、172 種の維管束植物が確認され（付録参照）、うち外来植物は 4 種のみであり、在来種の中には全国版レッドリスト絶滅危惧 II 類であるナツエビネや、岩手県レッドデータブック掲載種のタチガシワ（写真 1-2-5）のように、保全上重要な種が含まれていた。しかし、これら保全上重要な種の個体数は 1～数個体であった。また、開花がみられない草本・低木も多く認められた。これらの種については、光環境の改善や外来植物の排除などの適切な植生管理によって、個体群回復や健全な種子繁殖の促進が期待できる。また、過去の林床植生を構成していた植物が、土壌シードバンクや地下茎として残存していることも期待でき、それらの種は、間伐・枝打ち・下草刈り等による光環境の改善、落ち葉掻き等の攪乱、外来植物の排除を行うことで、再生できる可能性がある。

植生が単純化した場所での適切な管理については、知勝院を中心とする活動により、樹木葬墓地、曲淵自然観察林、クラムボン広場においてすでに成果が得られている。本事業の実施にあたっては、これらの先行事業での経験や成果の科学的モニタリング結果が活用できる。



写真 1-2-1 樹木密度の高い斜面林



写真 1-2-2 林床に笹が密生し、落ち葉が厚く積もったコナラ林



写真 1-2-3 ササ類が密生した放牧地跡地



写真 1-2-4 スギ植林地



写真 1-2-5 長倉地区樹林林縁に
生育するタチガシワ

第2章 「長倉地区における落葉広葉樹林の保全・再生事業」の実施体制

2-1 実施者の名称および住所

久保川イーハトーブ自然再生研究所（代表：千坂峻峰）が、宗教法人知勝院および東京大学農学生命科学研究科保全生態学研究室、NPO 法人北上川流域連携交流会、NPO 法人水環境ネット東北、樹木葬・里山保全の会、久保川イーハトーブ自然再生協議会参加者、および里山管理・自然再生に関する研修への参加者の協力のもとに実施する。

実施者の名称：久保川イーハトーブ自然再生研究所

実施者の住所：岩手県一関市萩荘字栃倉 7 3 - 1 9 3

2-2 実施者の属する協議会の名称

久保川イーハトーブ自然再生協議会